



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4095 号 2017.12.23 発行

冬至に合わせゆず湯いかが／八戸 デーリー東北 2017年12月22日  
入浴客を癒やしているゆず湯＝21日午後4時半ごろ、八戸市下長3丁目

爽やかな香りが湯けむりとともに広がる。1年間で日照時間が最も短い22日の冬至に合わせ、八戸市下長3丁目の「長寿温泉」（山本寿子代表）でゆず湯が行われている。入浴客は心地よいお湯に漬かりながら、今年の疲れを洗い落としている。23日まで。



### i P S 山中教授、パラ道下選 手とペア駅伝に 京都マラソン

京都新聞 2017年12月21日  
今年の京都マラソンで、両手を上げて笑顔でゴールする山中教授（2017年2月19日、京都市左京区・平安神宮前）

京都マラソン実行委員会は21日、来年2月18日に開催される京都マラソンに、応援大使を務める京都大 i P S 細胞研究所長の山中伸弥教授が出場すると発表した。また、視覚障害者でリオデ

ジャネイロパラリンピック女子マラソン銀メダルの道下美里さん（三井住友海上）も参加し、2人でペア駅伝に出場する。

山中教授は4年連続出場で、ペア駅伝は初となる。フルマラソンを走った前回は自己ベストを大幅に短縮する3時間27分45秒でゴールした。ペアを組む道下さんは山口県下関市出身。15日の防府読売マラソン視覚障害女子の部では2時間56分14秒の世界新記録で優勝した。

道下さんがスタートから府立植物園までの第1区、山中教授がゴールの平安神宮前までの第2区を担当する。

### オリパラ日本、こんなに便利 最新技術を展示会で体験 25、26日に東京・丸の内「カウントダウンショーケース」開催

日本経済新聞 2017年12月22日

2020年東京五輪・パラリンピックをテーマに日本企業の技術力をアピールする展示会「カウントダウンショーケース」が12月25、26日に東京・丸の内で開催される。外国人が空港に到着し、街に出て、観光スポットを巡り、スポーツを楽しむというストーリーに沿って、20年に日本がどんな社会になっているかを疑似体験できる。トヨタ自動車、パナソニックなど大手23社と中小企業17社が参加する。展示会は18年以降も場所や時期を変えて、20年まで続ける予定だ。

展示会を開催するのは経団連などで構成する東京五輪・パラリンピックの推進団体「オ

オリンピック・パラリンピック等経済界協議会」と経済産業省。場所は三井住友銀行東館のライジング・スクエアで、入場は無料。開催時間は 25 日が午前 10 時から午後 5 時まで、26 日が午前 10 時から午後 2 時まで。英語や中国語の通訳ボランティアも配置する。

通常の展示会とは異なり、企業別のブースを設けず空港やスポーツといったテーマ別に見せるのが特徴。仮想のバッテリーボックスに立ってプロ野球並みの剛速球を体験できる NTT データの「VR スポーツトレーニングシステム」や、音を振動や光に変換して伝える富士通の聴覚障害者向け小型端末「オンテナ」、指紋や声で本人確認する生体認証システムなど体験型の展示が中心となる。ホンダの水素ステーションからトヨタの燃料電池車に水素を供給する展示も予定している。経済界協議会事務局の村井典昭氏は「20 年以降に、どんなハードのレガシー（遺産）をつくり出せるのかを示していく」と話している。

### 劇場のピクニック 劇団態変、新作「翠晶の城」 現代の「愛」を問う意欲作 1月13、14日 伊丹・アイホール 毎日新聞 2017年12月21日

身体障害者による身体表現の可能性を追求する大阪の劇団態変が、新作「翠晶（すいしょう）の城」（金満里作・演出）を来年1月13、14日、兵庫県伊丹市のアイホールで上演する。「愛」に向き合う意欲作だ。

態変は1983年旗揚げ。幼い頃にポリオのため重度の障害者となった金満里が芸術監督を務める。せりふを用いず、レオタードに身を包んだパフォーマーたちが見せる身体表現は、障害そのものが未踏の美を生むという考えに立つ。

### 林文科相、16校新設の可否諮問＝19年度創設の専門職大・短大

時事通信 2017年12月21日

林芳正文部科学相は21日までに、2019年度に創設される実践的な職業教育を行う高等教育機関「専門職大学」「専門職短期大学」に関し、私立16校の設置認可の可否を大学設置・学校法人審議会に諮問した。

19年度の開設を申請したのは、専門職大13校（入学定員計4201人）、専門職短大3校（同190人）。設置審は18年9月下旬ごろ答申する見通し。

申請は次の通り（かっこ内は学部、短大は学科）。

【専門職大】国際工科（東京工科、名古屋工科、大阪工科）＝東京都新宿区、名古屋市、大阪市▽国際ファッション（国際ファッション）＝東京都新宿区、名古屋市、大阪市▽東都学院（保健医療）＝東京都目黒区、神奈川県茅ヶ崎市▽東京医療福祉（医療福祉、看護保健）＝東京都新宿区▽東京（医療福祉）＝東京都江東区▽金沢（職業経営）＝石川県白山市▽名古屋医療福祉（医療福祉、看護保健）＝名古屋市▽京都（実践栄養調理）＝京都市▽大阪医療福祉（医療福祉、看護保健）＝大阪市▽島根保健福祉（保健科学）＝島根県奥出雲町▽岡山医療（健康科学）＝岡山市▽高知リハビリテーション（リハビリテーション）＝高知県土佐市▽福岡（保健医療）＝福岡市

【専門職短大】ヤマザキ動物看護（動物トータルケア）＝東京都渋谷区▽日本歯科（歯科衛生）＝静岡県磐田市▽大阪調理（食育）＝大阪府泉大津市。（

### 「園児の声がうるさい」防音対策求めた上告棄却 読売新聞 2017年12月22日

神戸市東灘区の保育施設近くに住む男性が「園児の声がうるさい」として、運営する社会福祉法人（岡山県津山市）に慰謝料100万円と防音対策を求めた訴訟で、最高裁第3小法廷（木内道祥裁判長）は19日付の決定で、男性の上告を棄却した。

保育施設からの音について我慢の限度を超えているとは認められないとして請求を棄却した1審・神戸地裁と2審・大阪高裁判決が確定した。

7月の大阪高裁判決は、保育施設は「公益性・公共性の高い社会福祉施設」だとし、「園児が園庭で自由に声を出して遊び、保育者の指導を受けて学ぶことは、健全な発育に不可欠」と指摘していた。

### <いのちの響き> 地域移行のはざままで(1)

中日新聞 2017年12月13日

職員や入所者らと交流する服部晃子さん(右から2人目)  
=津市の三重県いなば園で



大規模障害者施設で暮らす人が施設を出て、自宅やグループホームなどで暮らす「地域移行」が各地で試みられている。しかし、昨年七月に連続殺傷事件が発生した相模原市の「津久井やまゆり園」の建て替えでは、施設をなくし入所者が地域で暮らす案も検討されたが、小規模施設を分散して建てることで決着。地域移行が容易でないことを示した。背景には、重度の障害者が入れるグループホームはまだ少なく、地域の受け入れる準備

も整っていないことがある。障害者が暮らす場所について、六回にわたって考える。

津駅から車で約三十分の家もまばらになった山あい。ナゴヤドームほどの広大な敷地に、保育園の園舎に似た寮や、校舎のような外観の管理棟が立ち並ぶ。畑やグラウンドもある。重い知的障害の人が多く暮らす大規模施設「三重県いなば園」だ。六歳から高校生までの子ども三十一人と、十八歳から七十六歳までの大人百二十三人が、子ども、成人それぞれの寮に分かれて生活している。

午前七時半、テレビとソファがある成人寮の共用フロアで、入所者の男性(30)が職員とじゃれ合っていた。「最近自分からトイレに行けるようになったね」。日頃のトイレ誘導の成果が出て、職員もうれしそうだ。

男性は自室の壁やドアを便で汚して、周囲を困らせることがある。親元を離れ、入所して三年。園での生活になじんで頻度は減ったが、重い自閉症のため、職員の配置換えなどがあるとやってしまう。「他にも大勢の利用者がいるので、付きっきりでないときの寂しさがあると思うんです」。寮長の野田寛将(ひろのぶ)さん(45)はそう話す。

成人寮の障害者のうち、七割以上の九十四人が、国の障害支援区分で最重度の「6」。食事やトイレにも助けが必要な人が多く、感情を抑えるのが苦手なテレビなどを衝動的に壊してしまう人もいる。

いなば園は一九七七年、県立として開設し、二〇〇六年から社会福祉法人「三重県厚生事業団」が運営を引き継いでいる。職員約百五十人のうち、百人近くが入所者を二十四時間態勢でサポートしている。管理棟には、精神科、歯科、内科、理容室も入っており、利用者は診察や散髪も毎月、園で受けられる。

一方、午前六時半の起床から午後十時の就寝まで、食事、入浴、休憩など、一日のスケジュールは決まっており基本、全員が同じ日程で暮らす。家族や成年後見人が会いに来る場合を除き、外出できるのは月一〜二回程度。職員が付き添って出掛けるときだけだ。

そこに窮屈さを感じる人もいる。服部晃子さん(36)は園に来て十六年。若くして母親を亡くし、施設しか自分の居場所はないと思ってきた。でも、五年ほど前、職員に誘われ、街中のグループホームを見学し、「グループホームがいい」と口にするようになった。

グループホームなら、ヘルパーの助けを借りて毎週末でも外出できる。近くに店も多く日用品などを好きなきに買いそろえられる。園にはない自由と便利さがうらやましいと思った。日中は作業所に通うことになるが、「がんばれる」と前向きだ。

園での日中活動ではケーキや菓子パンの絵を描くのが好きで、普段は人一倍集中して取り組める。しかし、気持ちの波がたびたびやってきて、何をすることも意欲が湧かず、着替

えやトイレも一人ではままならなくなるときもある。常に目が離せないとなると、終日、職員を配置する余裕がないグループホームでは難しい。

「焦ってグループホームに行って失敗するなら、行けるところが見つかるのをゆっくり待った方がいいのかなと思う」。そう自分に言い聞かせ、園での生活を続ける服部さんを、職員も複雑な思いで見守っている。（添田隆典）

## <いのちの響き> 地域移行のはざままで（2）

中日新聞 2017年12月14日



入所者の女性らと談笑する米倉恵里さん（右）＝津市の三重県いなば園で

午後七時、津市の山あいにある知的障害者施設「三重県いなば園」では、入所する百五十人の一日が終わりに近づいていた。夕食を済ませた成人寮の入所者たちはソファに腰掛け、入浴時間を待っている。そんな中、一人の男性（20）が、寮長の野田寛将（ひろのぶ）さん（45）を見つけるなり、廊下の向こうから一目散に走り寄ってきた。

「ごめん。お父さんは今日、迎えに来ないんだ」。無言で目に涙をためた男性に野田さんが声を掛ける。この日は週一回の帰宅日だったが、急きょ父親の都合が悪くなった。発達障害で、気持ちの切り替えが苦手なのも相まって、男性はその後もしきりに野田さんに詰め寄ってきた。

「ずっと施設で暮らしてもいいと思っている人は多分、いないと思いますよ」。三十五年勤める園の地域支援部長、米倉恵里さん（56）の実感だ。気持ちを言葉に出すのが難しくても、会いに来た家族を見送る時は必ずと喋りだすほど寂しそうな表情をする人、環境を変えるのは極度に不安でも、老後も施設に住み続けるかどうか問いかけると首を横に振る人…。そうした姿を長年、そばで見てきた。

園では業務の合間を縫って、職員がグループホームの見学や宿泊体験に入所者を連れて行っている。集団生活の園では自由に外出できないなど制約も多く、グループホームで暮らせるなら、移行するのが本人のためと考えるからだ。「自宅に帰るのが難しくても、せめて住まいの選択肢を広げてあげたい」。そんな思いで、米倉さんも携わっている。

ただ、成人の入所者は入れ替わりながら常に百二十人以上いるのに、実際に移行できるのは年に一人か二人。人手不足が慢性的な福祉現場にあって、国の基準で配置する職員が増やされている重度障害者のグループホームに参入する事業所は多くない。独特のこだわりや感情の起伏などを理解したヘルパーが確保できるとも限らない。同じ問題は、日中を過ごすデイサービス施設や作業所にも付きまとう。

このため、規則正しく作業所に通えるなど、生活リズムが安定した人でないと敬遠されがちなのが実情だ。成人寮の障害者の平均年齢は現在四十五歳。次の行き先がなく、二十年近く住み続ける人が過半数だ。

午後八時、夜勤態勢に入った園は一つの寮につき職員二人になる。一時間置きに見回りをして、翌朝七時半まで一人当たり約二十人の入所者に対応する。昨年七月、相模原市の知的障害者施設殺傷事件を受け、夜勤の増員も検討されたが、日勤の職員を回すほどの余裕はなかった。

職員たちは入所者と二十四時間をともにする中で、一人一人の障害を理解し、身の回りの生活を支援している。簡単な整頓や掃除など自分でできることは長所として伸ばし、規則正しい生活習慣を身に付ける手助けもする。地域の受け皿が整わない現状で、必要な支援が集約された施設に寄せる家族や成年後見人の期待もよく分かる。

それでも、「本人の立場で考えたとき、施設しか居場所がないとしたら幸せだと思いますか」と米倉さんは投げかける。生活の自由度が高いグループホームへの入居は、自分らし

暮らしの第一歩になるのではないかと。だから、地域にもこう期待する。「障害が重いからと、敬遠するのではなく、一步踏み込んで受け入れてほしい。その積み重ねが地域移行を前に進めるのではないのでしょうか」（添田隆典）

### <いのちの響き> 地域移行のはざままで（3）

中日新聞 2017年12月15日



面会に訪れた父親の小林仁充さん（左）と散歩する娘の久子さん＝愛知県春日井市の都市緑化植物園で

「いちに、いちに」。木々の葉が赤く染まった愛知県春日井市の植物園の小道を、小林仁充（きみのぶ）さん（79）と長女の久子さん（53）がゆっくり歩く。父が娘を支えるように、親子で腕をしっかり組んで。

久子さんには重い知的障害と、体幹機能の障害がある。話すことが不得手で、表情の変化もあまりない。一人で歩くとつまずいたり転んだりしてしまう。一年半前から植物園にほど近い障害者施設「養楽荘」で生活しており、仁充さんは毎週三回、会いに行っている。久さんの脚のリハビリとスキンケアを兼ねた二十分ほどの散歩は、親子水入らずの時間だ。

久さんは、養楽荘に入る前、三十歳のころから市内の愛知県心身障害者コロニーで生活していた。一九六八年に県が開設したコロニーは、成人の入所施設に病院なども併設した総合福祉施設。仁充さんも「ここでずっと」と思っていた。

しかし、障害者自立支援法が施行された翌年の二〇〇七年、県は成人入所施設の廃止を含むコロニーの再編計画を表明。障害児用の施設などを改築する一方、成人の施設は廃止し、入所者百四十人全員の地域移行を図る方針を明らかにした。

久さんは生後四十日で重い肺炎を発症。脳に十分な酸素が行き届かなくなり障害が残った。じっとしているのが苦手で、仁充さんが読みかけの本を破るなど、物を壊してしまうこともしばしばだった。

高校教諭だった仁充さんは毎日、授業が終わると車で一時間かけて、リハビリに久さんを病院に連れて行った。しかし、状態は上向かない。久さんの妹二人もいる。「このままでは家庭が壊れる」。やむなく、久さんが四歳のころ、障害児用施設に入って以来、施設を生活の場としてきた。

だから、県のコロニー再編計画を知らされたときは、こう思った。「再び地域で暮らそうなんて、現状を知らない空論」

実際、コロニーの成人入所施設の廃止が公表されて閉まるまでの約九年間に、グループホームに移った人は十四人のみ。百二十人以上はほかの施設を見つけ、入所する施設を替えただけだ。入所者の八割に重い障害がある。本人の希望を確認しづらい人が多い上、てんかんの発作などで見守りが必要で、職員が無理だと判断したケースもあった。

久さんも意思確認が難しい。仁充さんが様子を見ながら転居先を考えた。グループホームも見学したが、家の中の移動にも介助が必要な久さんには向かなかった。市内の別の施設を希望したが満室。同じように最後まで行き先が決まらない人は三十人余りいた。

このため、地元の社会福祉法人がコロニー近くの県有地に、四十人規模の入所施設を整備することになった。それが、久さんが現在暮らす養楽荘だ。その名前は、コロニーの成人施設から引き継いだ。

仁充さんは、妻（78）が入院中のため、いまは自宅で一人暮らし。養楽荘に行った後はいつも妻を見舞う。久さんを安心して任せられる施設があるからこそ、妻の看病にも専念できる。もしも自分に万が一のことがあれば、いよいよ久さんのよりどころは施設になる。だから、地域移行を進め、施設を減らす動きには違和感をぬぐえない。

「施設のおかげで救われている。そういう家族が現にこうしているんです」（添田隆

典)

## ＜いのちの響き＞ 地域移行のはざままで（４）

中日新聞 2017年12月20日



グループホームで暮らす小沢節子さん（左）。一緒に住む山本清美さんを部屋に招いておしゃべりする＝滋賀県東近江市で

毎日帰る「家」がある。自分だけの部屋がある。知的障害があり、小学校低学年から約四十年、施設暮らしだった滋賀県東近江市の小沢節子さん（56）にとって、それは当たり前のことではなかった。住んでいるグループホーム「明歌里（あかり）」は、障害者が施設を出て地域で暮らす「地域移行」で手に入れた居場所だ。

ホームは二階建ての一軒家。天井が高く開放感にあふれ、ほんのり漂う木の香りが温かさを感じさせる。入居するのは節子さんのほか、知的障害がある三十代女性と五十代男性、知的と身体の障害がある五十代男性の三人だ。四人全員に個室がある。

節子さんは、国が定める障害支援区分で二番目に重い「5」。自宅で親が介助して育てるのが難しく、七歳ごろ全寮制の施設に入所し、四十六歳まで社会福祉法人「蒲生野会（がもうのかい）」が運営する施設で暮らしていた。二〇〇七年に法人が地域移行を進めるため、グループホームを新築したのを機に、移り住んだ。

平日は法人が市内で運営する作業所に通う。成年後見人の手を借りて、毎月、一級の障害年金約八万一千円と作業所の工賃収入二千五百円の合計金額から、家賃や食費、光熱費など約六万円を支払う。

作業所には、午前八時半に迎えに来る法人のバスに乗って向かう。他のホームを経由し、午前九時前に到着する。担当する仕事は、はがきを作るため牛乳パックを細かくちぎる作業だ。同じ班の約十人で朝の会を開き、一日の流れや目標を確認する。仕事を終えてバスで帰宅するのは、午後四時半ごろだ。

新生活を始めたばかりのころは、毎晩泣いた。相部屋でいつも周りに人がいる施設とは違って、しんとした部屋で一人で眠るのは不安でたまらなかった。しばらくは施設の職員らが一緒に寝ていたが、部屋のドアを開けたままなら一人でも寝られるようになった。

男女別々のフロアだった施設では、トイレでもドアを開けっ放しだったが、男性もいるホームでは閉めなくてはならない。外出も月一回程度だったのが毎週のようになり、外でトイレに行く回数が増え、ドアを閉めることにも次第に慣れた。

ホームでは、パート職員の「キーパー」たちが支援する。十二人が交代で泊まり込んで、夕方から翌朝まで入浴を手伝ったり、ご飯を作ったりする。特別な資格はないが薬を飲ませたり、病気になったときは日中も看病したりする。

城野きみよさん（61）は、ホームができた当初からホームでキーパーをしている。「正直、責任も負担も重い。でも、以前は夜中に騒ぐなど不安定だった四人が、今は落ち着いてきた。その経過を見てきたので、これからも支えていきたいと思う」と話す。節子さんもすっかりホームでの生活に馴染んだ。「施設に戻りたい？」と聞かれると「いやや」とはっきり答える。

午後六時。お風呂を済ませ、皆で夕食を食べる前、節子さんが一緒にホームで暮らす山本清美さん（31）を自分の部屋に招き入れた。清美さんは節子さんのことを「お姉ちゃん」と呼ぶが、節子さんは自分は清美さんの「お母さん」だと思っている。

同じ施設にいたが、大人数だったため年が離れた二人が触れ合うことはほとんどなかった。それが十年一緒に暮らすうち、姉妹や母娘のように寄り添うようになった。「なでなで」。赤ちゃんの人形を膝にのせておしゃべりしながら、節子さんが何度も何度も清美さんの頭

をなでた。（細川暁子）

<いのちの響き> 地域移行のはざままで（５） 中日新聞 2017年12月21日



北川進さん（左）に散髪してもらう男性（右）。法人職員の松村優子さんが見守る＝滋賀県東近江市で

「男前になったな」。滋賀県東近江市の理容店で、オーナーの北川進さん（74）が顔そりを終えた男性客（54）に声をかける。男性はすぐ近くのグループホーム「明歌里（あかり）」で暮らしており、知的障害がある。ホームに住み始めた十年前から二カ月に一度、店に通う。北川さんに会うのは楽しみの一つ。先月、ホームの三人の仲間や職員と旅行に行った時もお土産を買って帰り、北川さんに届けた。

男性は人と交わるのが苦手。日中通う作業所でも朝の会には出席せず、廃品の整理など別の作業をして過ごす。ホームでも自分が一番にお風呂に入れないことに腹を立てて、玄関から飛び出して行ったことが何度もあった。

そんな男性は毎年二月、地域の「スター」になる。ホームも北川さんも入っている地元自治会の新年会だ。男性は六年前から毎年、新年会に参加し、カラオケで盛り上げる。初めて参加した時は、地元の人たちも、「歌えるかな？」とおそろおそろ男性にマイクを渡した。しかし、男性はテレビで見た近藤真彦さんの「ギンギラギンにさりげなく」を物まねで歌いだした。

壁に片手をつけてポーズを決めたり、参加者に握手を求めたり。背が高く体格がいい男性の姿はサマになっていた。「おー」「うまいなー」。参加した約二十人は大いに沸いた。男性はビールが大好きで、北川さんらについて回った。「お酒を酌み交わして、お客さんとしてだけでなく地域の仲間として付き合えるのは、ありがたいことだ」と北川さんは笑う。

男性は家庭の事情で子どものころから施設に入所し、社会福祉法人「蒲生野会（がもうのかい）」が運営する障害者施設で暮らしていた。十年前、入所者が施設を出て地域で暮らせるようにと、法人が建てたホームに移った。大勢が入所する施設では自己主張したり、人目を引こうとしたりすることはほとんどなかった。法人職員で、施設のころから男性を知る松村優子さん（45）は「施設からホームに移り、地域でたくさんの人と出会い、もう一度育ち直しをしたかのように『自分らしさ』が出るようになった」と話す。

しかし、社会の障害者への理解が浸透したわけではない。法人は二〇〇九年、市内の別の地域の市有地にホームを新設しようとしたが、地元の反対に遭った。自治会からの求めに応じて市の職員らと一緒に説明会も開いたが、約二十人の参加者は「なぜここに建てるのか」と理解してくれなかった。やむなく建設地を別の場所に変更した。

ホームの入居者がトラブルを起こすこともある。数年前、ある自閉症の男性が一人で外出し、近くの商店の箱の中から缶ジュースを勝手に持って行ってしまったことがあった。ジュースが減ることが何度か続き、店員の女性（71）が見張っていたところ、男性がジュースを持って帰ろうとするところを目撃。「おばちゃんとも困るからお金を払ってね。買い物は誰かに付いてきてもらわないとだめよ」と男性を諭し、ホームにも連絡した。一人で道路を渡って店に来る男性が、事故に遭わないかという心配もあった。他のホームの利用者もよく買い物に来て職員とも普段からあいさつを交わしているため、声をかけやすかったという。

男性と職員が店と一緒に謝りにきて以降、問題は起きていない。女性は「地域で見守って、理解しあおうとすることが大事」と話す。（細川暁子）

<いのちの響き> 地域移行のはざままで（６） 中日新聞 2017年12月22日

ワンフロア八部屋の三階建てアパート。グループホームは一戸建ての家が多いが、滋賀

県東近江市の社会福祉法人「あゆみ福祉会」が市内で運営する「ホームぱすてる」は、このアパートの二部屋だけを借りたグループホームだ。他の部屋には、一般の人が入居している。

ホームで暮らすのは、男女の二人。2DKの部屋にそれぞれ住む。女性（42）は、知的障害で自閉症がある。障害支援区分は最重度の「6」だ。特別支援学校を卒業後、実家から同法人が運営する作業所に通っていた。だが、両親が亡くなると実家での自活は難しくなった。

作業所で食事する寺田賢二さん（左）と女性。寺川登さん（中）は「障害者も当たり前のように住む場所を選ぶ社会になってほしい」と話す＝滋賀県東近江市で



そのため、二〇一一年に自宅から同法人が運営する別のホームに転居。しかし、こだわりが強く、気に入らないことがあると、人に靴を投げつけたり、人の服を破ってしまった。生活を支援するキーパーたちも「どうすればいいかわからない」と悩んだ。

そこで、法人理事長の寺川登さん（56）は、他の人と一緒に暮らすよりも、女性には一人で生活する方が向いていると判断。一三年に、アパートの部屋を借りて開いたのが、ぱすてるだ。女性が作業所から帰宅する夕方から翌朝までと、作業所が休みの土日祝日、キーパーが交代で訪れる。時々、女性がジャンプして床を踏みならずこともあるが、防音マットを敷いていることもあって、他の部屋からの苦情はないという。

隣室には、統合失調症で支援区分「3」の寺田賢二さん（50）が暮らす。朝夕の食事は、寺田さんが女性の部屋に行ってキーパーが作った食事を三人で一緒に食べる。

寺田さんも人間関係に悩んできた。二十年ほど前は、障害年金を受給しながら倉庫の出荷作業などのアルバイトをして一人暮らしをしていた。だが、指示されたことをうまくできず働く自信をなくし、生活に困るようになり、女性と同じ作業所に通い、五人で暮らすホームに入所した。

家賃負担が軽くなり生活は安定した。だが、他の入所者が自分の部屋を勝手に開けて本などを見るのが耐えられず、口論になることもたびたびだった。別のホームに移ったがここでもうまくいかず、寺川さんに「一人で暮らしたい」と相談し、ぱすてるに移った。

食事中、女性が怒りだして、寺田さんを押ししたり足を軽く蹴ったりすることがある。怒った寺田さんが自分の部屋に戻って一人で食事をしたこともある。しかし、その後「賢二さんは？」と女性が気にしていたとキーパーから聞き、また一緒に食べるようになった。

女性が攻撃的になることは減った。一緒に暮らすうちに女性が大声を上げても、テレビを見るなどして気にしないしていると、女性も落ち着くことも分かった。

以前のホームでは、周囲との人間関係に悩むこともあったが、ぱすてるで暮らすうち、こう思うようになった。「障害の重い軽いはあるけれど、誰も好きで障害者になったわけじゃない。ウマが合わない人はいても、悪い人は一人もいない。それぞれに合った住む場所や働く場所がある」

月に一度、寺田さんは七十代後半の母親に電話で近況を報告する。だが、「いずれ親は亡くなる。自分で生きていかないと」。作業所には電車で通い、アパートの住民と擦れ違えば進んであいさつをする。

「私たちはハンディがあるけれど、発信することはできる」。支援があればアパートに住んで仕事をし、社会の中で生きていける。このホームは、二人から社会へのそんなメッセージだ。（細川暁子）

